

2017年(平成29年)

4月14日

金曜日



# 家で自然に尊厳ある最期

今年4月で在宅医療を始めて26年目を迎えた。おじいちゃんを看取り、彼を介護していたおばあちゃんを看取り、そして、今はその息子を看取るという幾星霜である。

何年も往診しているお宅では、そろそろお迎えが来そうだが

とちぎの風

人生支える在宅医療

太田秀樹 14



おた・ひでき 1953年、奈良市生まれ。自治医大大学院修了。92年「おやま城北クリニック」開業。現在は医療法人アスムス理事長として在宅医療を推進。

など予感することがある。医者  
が予感で仕事をすることは非科学的と吐られそうだが、家族も同じように感じていることが多  
い。長くかかわるからこそわか  
るものがある。寿命を血液検査  
やCT検査で知ることができな  
い。「いざ」といときはどうし

「インフォームド・コンセ  
ント」とは、治療方法や治療効  
果、副作用など、医者がいろい  
ろなことを詳しく説明し、納得  
いただく手続きのことで、「説  
明と同意」と訳されている。命  
にかかわる場面では、今後の治  
療の可能性や予後などを話せば  
ならないのだが、「自宅で安ら

ましよう」と相談すると、「家  
で最期までお願いします」と言  
われることが増えてきた。

かに」を要望する家族に対して  
「僕も自宅で自然がいいと思  
う」と答えることにしている。  
何百例もの最期を在宅で支え  
た。経験則だが、延命的な治療  
を行わず、医学が暮らしを支配  
せずに看ると眠るように逝く。  
最期に好物の天ぷらが食べられ  
た、酒が飲めた、傍らに愛犬が  
いた、娘と手をつなぐことがで  
きた……。最期までうなずいた  
り、手を握り返したり、感謝の  
気持ち伝えることもできる。  
1分1秒でもと病院での長寿を  
目指すより、家で天寿をまっとう  
する。これが尊厳ある最期で  
はないだろうか。(次回21日)